

「昭和 61 年水害とその後の復興を振り返る」

平成 30 年 1 月。昭和 61 年 8 月の小貝川洪水からの復旧に向け、筑西市（当時の下館市）で行われた激甚災害対策特別緊急事業—通称、「激特事業」の起工式から 30 年を迎えます。

国土交通省下館河川事務所では、これを機に、昭和 61 年洪水や激特事業の様子を掘り起こし、皆様にお伝えしていくとともに、この取り組みを通じて、現在進めている鬼怒川緊急対策プロジェクトの更なる推進を図ります。

このシリーズでは、小貝川の洪水や激特事業を経験された方々等にお話を伺っていく予定です。今回は、洪水の発生からその後の復興の時期にかけて下館市長を務められた濱野正氏と、建設省下館工事事務所（現在の国土交通省下館河川事務所）で事務所長として激特事業の指揮を執った福田昌史氏のお二方にお話を伺いました。

背景写真：昭和 61 年 8 月 台風第 10 号による被害（母子島付近）



小貝川激特事業起工式(昭和63年1月30日)

福田元下館工事事務所長

建設省下館工事事務所長（現在の国土交通省下館河川事務所長）として激特事業を指揮



濱野元下館市長
洪水の発生からその後の復興期にかけての下館市長



インタビュー（敬称略）

濱野正（元下館市長）

福田昌史（元下館工事事務所長）

——【聞き手】里村真吾（下館河川事務所長）

【昭和 61 年洪水と市長としての思いなど】

——最初に、昭和 61 年の洪水の時に下館市長を務めていらっしゃった濱野さんから、当時の状況など、記憶に残っている印象的なことをお話いただけますか。

濱野 昭和 61 年以前から、母子島のあたりは毎年、夏になると大水が出ていたんです。私も、市庁舎に詰めたり、現場に行ったりしていました。そんな状況だったので、住民も備えがあったんだと思います。昭和 61 年の時も、浸水家屋は多かったけれど、死者が出なかったのが幸いでした。住民の救助活動では、自衛隊にも救助要請

をしましたが、最初から地元の消防団が救出活動に頑張ったのと、過去の水害で危ないところは知っていて、うまく避難や救助とかの誘導ができていたと思います。

——普段から水防災に対する意識があって、それが死者ゼロに繋がったということですね。

濱野 とにかく毎年大水が起きるのは困ったと。



S61.8 台風 10 号による被害（母子島付近）

何とかしなきゃならないって、そういう考えでいたところに、この大洪水になった。それで、これをどうするかということ、河川事務所の方へもいろいろとお願いに行きました。

私が市長になった当時の茨城県知事である竹内知事は、建設省の都市局長からなった人でした。私は、これからは都市計画事業を中心に進めなければ町は発展しないと思っていたこともあって、竹内知事を通じて建設省との関係が深まっていたところに、この水害と激特事業でした。建設省も本気で取り組んでくれたと感謝しています。

——水害の前からそういう人脈を作っておられたこともあって、単なる河川事業ではなく、新たな街づくりを伴う集団移転のような事業にもつながっていったのかな、と聞いておりました。



左から福田氏、濱野氏、里村事務所長

【激特事業の立ち上げと用地交渉】

—— そういう中で激特事業として母子島遊水地を造りあげていくこととなりますが、この事業に取り組むにあたって、思いを込められたことや苦労されたことなどをお聞きします。

福田 激特事業の一つ目の課題は、母子島の移転を含めた遊水地事業の位置づけでした。当時はいろいろ考えていたようですが、私が下館に来て考えたのは、この事業は河川法に則った事業として進めるのが、方法としても時間的にも最も適当ではないかということで、まずはそれまであった計画の改定を早急に、というのが僕の思いでした。

母子島に遊水地を造るには、調査の結果、5つの集落、109戸の方々の移転が必要であることが分かりました。まずはこの方たちの同意が必要なわけです。時間が限られている中なので、一人ひとりと交渉している時間がなかった。そこで、移転をお願いする方々にも組織を作ってもらい、組織と組織で対話をするという方法で進めることになりました。この時は、交渉委員会ということで、二つの組織を作ってもらいました。一つはご自身が移転される方々のための推進委員会。もう一つは、ご自身は別の場所に住んでいて自分は移転しないけれど、移転地に土地を持っておられる方。事業を進めるには、この方々の理解が必要不可欠なので、こちらは地権者対策委員会という組織を作ってもらい、用地交渉を進めました。

また、移転先の場所を決めるのも大変なことでした。最終的に決まったのが、小釜(おかま)という地区ですが、そこは、移転する5つの集落の方々と、地権者対策委員会の方々が持っている土地がたまたま半々くらいでした。そういう中で最終的に折り合いをつけて場所を決めたという経緯がありました。

その次は価格です。遊水地になる場所は「河川区域」という位置づけになり、人が住んではいけない場所になります。当然、土地の価格は低下しますので、その対価を国が払うということですが、これもまた大変でした。ここにおられる濱野市長にも、何度も相談させて頂いて、最大限考えて頂きました。



調印式

濱野 用地交渉は夏の暑い時期でしたが、所長と一緒に何十回か各集落へ行きました。

まず、集団移転をすることの理解を受け
てから農地に対する補償の交渉をしまし
たが、これもなかなか決まらなくて大変
でした。最終的には1反いくらと理解を
得て決まりました。

福田 109 戸の方々に移転をしてもらうのに 5
年というのは、かなり短い時間だったと
思います。ベースとして、水害から縁を
切りたい
という思
いが地域
の方の心
にあった
のではな
いかと思
いました。



ほぼ移転が完了した旭ヶ丘
(当時)

【新しい取り組みと技術開発】

——激特事業を進めていくなかで、福田さん
が新しく取り組んだことなどを、お聞か
せいただけますか？

福田 災害は起き
てしまいま
したが、そ
の下館から、
明るい話題
を発信した
いという気



フラワーカナル

持ちが強くありました。その取り組みの
一つがフラワーベルトです。最初は、藤
代で 500m くらいで始めましたが、地域
の人から「川に花があったほうがいい」、
「川づくりをやりたい」という声が上が
ってきました。それで、好きなように使
ってくださいと、コスモスの種を一升枡
で渡しました。町の人が一生涯懸命にな
って、みるみる延長が伸びて行きました。
あとは技術開発です。大きな事業です
から、新しい技術を導入しました。一つ
は、川神馬のポンプ場のゲートに排水
ポンプを連

動させたもので、2つの施設をまとめる
ことで、コストダウンを図りました。ま
た、「かごマット」というものをとりい
れました。従来、川の護岸はコンクリ
ートブロックを使っていましたが、かご
マットを取り
入れるこ
とで、地
形の変形
で壊れに
くく、ま
た植物も
生えるの
で、より
自然に近
い風景を
維持でき
ます。

これは鬼怒川で第1号をやったので「キヌ
マット」とも呼ばれています。地形の変
形に強い工夫としてもう一つ、「動く樋
管」を採用しました。「樋管」という
のは、内
水を川に
流すため
に、堤防
の中に管
を通した
ものでは
ありますが、従来は動いたらいけない
ということで固定していました。これを、
地盤と同じように柔軟に動くようなもの
にして、壊れ
にくくす
るような
工夫をこ
こで始め
ました。



越流堤「キヌマット」施工

【川への思い】

——濱野さんが市長でおられた時に、川、特
に小貝川に対して、どのようなイメージ
を持っていらっしゃいましたか。

濱野 小貝川は、下館からは少し東側に離れて
いるので、私たちが遊んだのは街中を流
れる勤行川なんですね。若いころには、
そこで水浴びをしたり、水練を覚えたり、
竹ざおで走る和船に乗ったりしました。
今は、若い人たちと川とのつながりは、
密接ではなくなったと思いますね。今は
水質も良くなっているようなので、も
っと子どもたちも近づけるような、そ
ういう川になったらいいと思います。

——私たちも今、「水防災意識社会」と言っ
て、そこに流れている川がいざという時
には溢れるかもしれない、ということ
を常に

意識しながら川沿いに住むことが大事だということを伝えていく取り組みを、今の須藤市長ともやらせていただいているところです。そこにも通じる話だと思いつながりながらお聞きしていました。水浴びをしたりボートに乗ったりなど、日頃の生活の中で川で遊んでいたりとすると、その川を知ることにつながりますね。

濱野 そういうことで、色々なことをきっかけにして、もっと親しめるようなところになればいいなと思います。今はサケが遡上してきていたり、先日、筑波山から日が昇る写真が新聞にも出ていました。



「るぶ」筑西市版

——ダイヤモンド筑波ですね。

福田 遊水地がこんなふうになるとは、当時は全く思っていませんでした。こういうのも、身近な話題になる一つのきっかけになると思います。



母子島遊水地完成時

——そうですね、こういうのをきっかけにして母子島が人でにぎわえば良いですね。激特事業で、地域の安全の向上とにぎわいの創出とを兼ね備えた整備ができれば良いなと思います。



母子島遊水地と桜（現在）

【最後に一言メッセージを】

——最後に一言ずついただきたいと思います。福田さんには、私だけでなく現職の国土交通省の事務所長に対するメッセージを。



里村下館河川事務所長

濱野さんには、これから災害に向き合っていく必要がある、現職の首長さんたちに対するメッセージをお願いします。

福田 私たちが育った時代とは、時代環境も組織も違いますから、事務所長の心構えとしては、今まで常識的に扱ってきたことを、もう一度疑ってかかるという気持ちを持ってほしいということです。「計画でこう決まっています」というだけで終わらないで、本当にその「計画」が、実際に起こっている現象に十分対応できているのか。そういうことを振り返ることが必要な時代に入っているのではないかと思います。それから、いい意味で、色々なことにチャレンジをする気持ちを持ってほしいと思います。

濱野 我々のころは、年に1回、鬼怒川沿いの市町村長が集まる会がありました。そういう会合をして、各市町村長の意見を直接聞くことで、各地区の状況が身近になると思います。そういう機会をまた持ってもいいと思います。

——今日は、貴重なお話を聞かせていただいて本当にありがとうございました。今日お聞きした話をこれから私たちも活かしていきたいと思つたし、筑西市や地域の方々にもお伝えしていきたいと思つた。

——了